むべきにや、ひもろぎをいふなるべし、ろぎノ反り、ひを略す、社地には必ず林叢あり、俗に森をよむは盛也と注し、木多貌と注せるをもて也、又史記に、畢在鎬東南杜中、注に、徐廣曰、杜一作社と見えたれば、杜と社を同意に用たるにや、委くいはんには、もりは樹をもて神體と云たるをいひ、やしろは神舍を構へたるをいふ成べし、六帖にも、人づまはもりかやしろかとならべよめり、

〔地方要集錄〕森といふは、寺社等の境内等に木を植立置、茂りて材木薪にも伐とらず立置くをいふ、林といふは、何方にても山、河原か、原等に、木を立置候て、材木薪にも伐候、木立茂りたるを林と云也、

名森

〔枕草子六〕もりは

おほあらぎの森　云のびのもり　こゝゐのもり　こがらしの森　云のだのもり　いくたの森　うつきのもり　きくたのもり　いはせの森　立聞のもり　ときはのもり　くるべきのもり　神なびの森　うたゝねのもり　うきだのもり　うへ木のもり　いはたの森　かうたての森といふが、みゝとゞまるこそあやしけれ、もりなどいふべくもあらず、たゞひと木あるを何につけたるぞ、こひのもり、こはたのもり、

〔奥義抄上ノ下〕出萬葉集所名　普通名所不注

杜

いはせのもりかみなびの　いくりのもりいもがいへに　いはたのもりやましろの　うきたのもり　さくさいのもり　うなでのもりまとりすむ

〔八雲御抄五名所〕杜

うきたのもり山、万、志めおほあらきの、おほあらきの同上品也古今　いはたの同万たむけ　はづかしの同　後ミつの同　後撰、こつのもりとも、淀にありといへり、は、その同後拾頼宗公　見かさの大、万おほのなか　神なびの同　古　いはせの同、万、神